

國學院大學学術情報リポジトリ

「思さる」の「る」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 一男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000916

「思さる」の「る」

大久保 一 男

一 緒

源氏物語に用いられている、敬語動詞「思す」に下接した助動詞「る」については、これを、自発・可能の意に解することと並んで、尊敬の意に解することのある注釈や訳がある。私が源氏物語を読む際に必ず参照し教示を得ている「新編日本古典文学全集」（小学館刊）所収本にも、例えれば次のような訳（↓の下）の施された箇所がある。

（本文は『源氏物語大成 校異篇』本文による。ただし、表記は改める。）

上（≡桐壺帝）も、藤壺の見給はざらむを飽かず思さるれば、（紅葉賀、二三七頁3行目）

↓物足りなくおぼしめすので、（三二頁）

世の重しとものし給へる大臣の、かく世を逃れ給へば、おほやけ（≡朱雀帝）も心細う思され、（賢木、三七九）

↓帝も心細くお思いあそばし、（一三九）

（光源氏ハ）かかる有様も慣らひ給はず、所狭き御身にて、珍しう思されけり。（若紫、一五一10）

↓珍しくお思いになるのだった。（一九九）

このような、「思さる」の「る」を尊敬の意に解することについて、小稿は、源氏物語のいわゆる第一部（桐壺・藤裏葉）・第二部（若菜上・幻）の、地の文における単数主体（主語）の用例の考察からは、その根拠が見出せないこ

とを述べる。

二 「思さる」「思す」の使用対象

二・一

もしも「る」が尊敬の意を表しているとしたら、「思さる」は二重敬語であり、それは「思す」よりも敬意が高く、したがってその使用対象は「思す」の使用対象よりも身分上高位の人々であるのが自然である。そこで、「思さる」「思す」それぞれの使用対象を示して観察することしよう。なお、ここでは、源氏物語を第一部と第二部に、さらに第一部については紫上系の巻と玉鬘系の巻とにそれぞれ分けて示すことにする。第一部を二つの系列に分けるのは、地の文における光源氏に対する「せ（させ）給ふ」「おはします」の初出箇所について、ともに、紫上系においては中将 diventato からであるのに対して玉鬘系においては中将当時から用いられているという、両系間におけるずれがあるとする、渡辺英二氏の指摘を踏まえての措置である。（なお、「おもほす」および「思し」型複合動詞は、

考察の対象から除く。）

【光源氏に用いたもの】（身分名は当該用例当時の身分・境遇。数字は用例数。以下同じ）

○第一部紫上系

「思さる」

中将 4 大将 30 無位 9

内大臣 21 太政大臣 3

「思す」

中将 20 三位中将 9 宰相中将 3 大将 37 無位 40

内大臣 77 太政大臣 13 准太上天皇 1

○第一部玉鬘系

「思さる」

中将 21

内大臣 4 太政大臣 11

「思す」

中将 71

内大臣 4 太政大臣 59

両系において「思さる」が中将当時から用いられており、「せ（させ）給ふ」「おはします」について指摘され

るような、光源氏の身分がある地位に達してから使用されるというような事象が見られず、中将・大将・大臣当時に「思さる」・「思す」がともに用いられており、「思さる」・「思す」間に身分上の差異による使い分けが認められない。なお、紫上系にのみの孤例ではあるが、准太上天皇当時に「思す」の使用例があることは、「思す」が高位の対象にも用いられることを示すものとして注目される。

○第二部

「思さる」

准太上天皇 37

「思す」

准太上天皇 80

「思さる」と「思す」との使用対象身分が同一である。

【光源氏以外の人に用いたもの】（用例数は男女の最高位の人についてのみ示す）

○第一部紫上系

「思さる」

桐壺（帝） 12 朱雀（帝） 7 冷泉（帝） 2

右大臣 頭中将（権中納言・太政大臣）

藤壺（中宮・入道） 10 秋好（前斎宮・女御） 六条御息所（父、大臣） 大宮 葵上 紫上（新枕後） 朝顔（父、宮） 朧月夜（尚侍。父、大臣）

「思す」

桐壺（帝・院） 11 朱雀（帝・院） 12 冷泉（東宮・帝） 16

兵部卿宮 式部卿宮

左大臣 右大臣 頭中将（権中納言・内大臣） 夕霧

（六位・宰相中将・中納言）

藤壺（女御・中宮・入道） 24 弘徽殿（女御・皇太后）

秋好（斎宮・前斎宮・女御） 六条御息所 大宮 女五

宮（大宮妹） 葵上（結婚前・後） 紫上（新枕前・後）

朝顔 朧月夜（尚侍） 兵部卿宮北の方 式部卿宮北

の方 雲居雁（結婚前・後。父、大臣） 北山の尼君

○第一部玉鬘系

「思さる」

冷泉（帝） 2

頭中将（内大臣）

末摘花（父、宮） 玉鬘（父、大臣）

「思す」

冷泉(帝) 2

兵部卿宮 式部卿宮

左大臣 頭中将(内大臣) 鬚黒(大將。父、大臣)

秋好(中宮) 2 弘徽殿(冷泉帝女御) 大宮 紫上

(新枕前・後) 末摘花 花散里(姉、女御) 玉鬘

両系とも、「思さる」・「思す」のどちらもが、最高位の帝・中宮から、大臣家を出自とする人々(夕霧・鬚黒・葵上・朧月夜・玉鬘・花散里)までの範囲内(ただし、北山尼君は出自不明)で用いられていて、「思さる」と「思す」との間に使用対象の身分上の差異が認められない。そして、葵上・朧月夜・玉鬘に「思さる」の用例があり、桐壺・朱雀・冷泉の各帝および藤壺中宮に「思す」の用例があることは、「思さる」が「思す」よりも使用対象の身分が高いわけではないことを端的に示す事象である。

○第二部

「思はる」

朱雀(院) 3 冷泉(帝・院) 2 今上(東宮・帝) 2

兵部卿宮

頭中将(致仕太政大臣) 夕霧(中納言・大納言)

落葉宮 女三宮 紫上 雲居雁

「思す」

朱雀(院) 14 冷泉(帝) 1 今上(帝) 1

兵部卿宮 式部卿宮 匂宮

頭中将(太政大臣・致仕大臣) 夕霧(中納言・大納言)

柏木(中納言)

秋好(中宮) 1 明石姫君(女御・中宮) 11 承香殿

女御 落葉宮 女三宮 一条御息所(落葉宮母) 紫

上 朧月夜 雲居雁 玉鬘 真木柱 四君(致仕太政

大臣北の方、柏木母)

「思さる」の使用対象のすべてが「思す」の使用対象になっている。その人々よりも下位で「思す」のみの使用対象になっているのは、柏木(中納言)と真木柱(兵部卿宮との結婚前。父、鬚黒大將は右大臣の子)とであるが、「思さる」の使用対象のなかに夕霧と雲居雁がいることと考え合わせるならば、このことのみをもって「思す」の使用対象がより低位にまで及ぶということにはならないと考えら

れ、したがって、「思さる」・「思す」間に、身分による使い分けが認められないのである。そして、「思さる」に夕霧・雲居雁に対する使用例があり、「思す」に帝・院に対する使用例があることが、「思さる」が「思す」よりも使用対象の身分が高いわけではないことを示しているといえるのである。

二・二

では、何人かの人物を例として、それぞれの人物に対して「思さる」と「思す」とがともに用いられていることを、実際の例によって示そうと思うが、ここでは、同一の人物に対して「思さる」と「思す」とが一文中で近接して用いられているものを挙げることにしよう。

(源氏ハ) 御仏名も、今年ばかりにこそはと思せばにや、常よりも殊に錫杖の声々などあはれに思さる。

〈幻、一四二・三・四〉

(藤壺ハ) 御宿世の程を思すには、いかが浅く思されん。〈須磨、四一六・九・九〉

(大宮ハ) いといとほしと思すなにも、男君の御か

なしさはすぐれ給ふにやあらん、かかる心のありけるも、うつくしう思さるるに、〈少女、六八五、13・14〉

(朱雀院ハ) かき乱り悩ましく思さるれど、この宮の御こと聞こえ定めつるを、心安く思しけり。〈若菜下、一〇四九・七・八〉

(女三宮ハ) おほけなき心もうたてのみ思されて、世に長かれとしも思さざりしを、かくなむと聞き給ふは、〈柏木、一二四九・四・五〉

(六条御息所ハ) 俄に重く患ひ給ひて、物のいと心細く思されければ、罪深き所ほとりに年経つるも、いみじう思して、尼になり給ひぬ。〈濔標、五〇五一・二〉

挙例六例中、先の三例が「思す」・「思さる」の順に、後の三例が「思さる」・「思す」の順に用いられているものである。

二・三

先の二・一の考察によって、「思さる」と「思す」との間に身分の差異による使い分けが認められず、「思さる」が「思す」よりも使用対象の身分が高いわけではないこと

が知られるのである。すなわち、「思さる」の「る」が尊敬の意を表して「思す」の敬意を増強する働きをしていると見ることは、新たに何らかの理由が見出されない限り、根拠が伴わないのである。この結果が得られたことで、小稿の目的はひとまず果たされたことになる。

三 「思し召さる」の「る」

三・一

「思ふ」の主体敬語（尊敬語）として最も高い敬意を表すのが「思し召す」である。その使用対象の範囲は極めて狭い。前に倣って揭示する。

【光源氏に用いたもの】（第一部玉鬘系には使用例が無い）

○第一部紫上系

内大臣1

○第二部

准太上天皇1

【光源氏以外の人に用いたもの】

○第一部紫上系

桐壺（帝・院） 12 朱雀（帝・院） 3 冷泉（東宮・帝） 8

藤壺（入道） 1

○第一部玉鬘系

冷泉（帝） 1

○第二部

朱雀（院） 5 冷泉（帝・院） 2

以上であって、使用対象は帝・院と后に限るのが原則で、内大臣当時の光源氏に用いた（絵合、五七四9。諸本、同）は例外と見なすべきであろう。すなわち「思し召す」の表す敬意の極めて高いことが確認されるのである。

三・二

「思し召す」が原則として帝・院・后に対して専用の、敬意度が極めて高い敬語であるならば、次に掲げるような、「思し召す」に下接した「る」は、敬意度をさらに増強するための、尊敬の意を表すものと見ることはできない（そのことを踏まえて、右に示した「思し召す」の用例数には「思し召さる」をも算入してある）。

（更衣ガ）あるかなきかに消え入りつつものし給ふを御覽するに、（桐壺帝ハ）来し方行く末思し召されず、よろづのことを泣く泣く契り宣はすれど、（桐壺、八
11）

上（『朱雀帝』も恥づかしうさへ思し召されて、御よそひなど殊に引き繕ひて出でおはします。〈明石、四七六八〉

（父）院に別れ奉らせ給ひし程は、（冷泉帝ハ）いといはけなくて、物深くも思されざりしを、（此ノ度ノ母宮ノ容態ヲ）いみじう思し嘆きたる御気色なれば、宮（『藤壺』もいと悲しく思し召さる。〈薄雲、六一四13〉
上（『冷泉帝』も、年ごろ御鏡にも思し寄ることなれど、聞こし召ししことの後は、またこまかに見奉り給うつつ、ことにいとあはれに思し召さるれば、〈薄雲、

六二13〉

これらの「思し召さる」の「る」は、尊敬とは別の意味を表すものであるはずで、挙例中の最初の例については可能の意（「お考えあそばしたくてもおできにならず」の意）かと思われるほかは、いずれも受身の意とは考えにくく、し

たがつて自発の意を表すとするのが妥当であろう。

四 同一人物に対する「思し召す」・「思す」の 近接併用

ところで、この、敬意度の極めて高い「思し召す」が、同一の人物に対して「思す」と近接して用いられている例がある。

（朱雀院ハ）いと堪へ難う悲しと思して、あるまじきこととは思し召しながら、夜に隠れて出でさせ給へり。〈柏木、一二三七9・9〉

上（『冷泉』は、王命婦に委しきことは問はまほしう思し召せど、「∴（冷泉心話）∴」とぞ思せど、さらについてでもなければ、いよいよ御学問をせさせ給ひつづ、〈薄雲、六二三5・7〉

右の、朱雀院に対する例については、「思す」の後に「思し召す」、さらに「させ給ふ」が続くことによって、また、冷泉帝に対する例については、「思す」を先の「思し召す」と後の「させ給ふ」とが挟むことによって、敬意の

表し方の基調としては、もっとも高い度合いで遇していることになるのだと思う。とはいえ、敬意度の異なる二つの敬語が同一の人物に対して近接して用いられていることは事実であり、このことは、同一の人物に対しては常に一定の敬意度をもつ敬語を用いるということではないという、敬語運用上の一面を示している事象なのである。

したがって、二・二に挙げたような、同一の人物に対して「思さる」と「思す」とが近接して用いられている例のあることをもって、「思さる」の「る」が尊敬の意ではないとすることはできない。「思さる」と「思す」とが、使用対象の身分の範囲がまったく重なることをもって、「思さる」の「る」が尊敬であるとする根拠がないことを主張するのである。

なお源氏物語全巻（第三部も、そして発話文・心話文も含めた）における「おぼえ給ふ」と「思さる」の用法を対照的に考察された小杉商一氏は、『おぼす』に更に尊敬の『る』が付加されたと思はれる用例^②が発話文に一二例、心話文に三例あり、地の文には見られないとされる。

五 「思さる」の「る」

五・一

「思さる」の「る」の意味が尊敬でないならば、それは自発・受身・可能のいずれかの意を表すことになるが、小稿が考察の対象とした、源氏物語第一部・第二部の地の文中に用いられた単数主体の「思さる」について、物語を通読する過程で得た感触として、ほとんどの用例が自発の意に解しうると思われる。ここには、自発の意で、連続して用いられた二例だけを掲げる。

（紫上八）自らの御心地には、この世に飽かぬこと無く、後めたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとどめまほしき（こ自身ノ）御命とも思されぬを、年頃の（光源氏トノ）御契りかけ離れ、思ひ嘆かせ奉らむことのみぞ、人知れぬ御心のうちにも、物あはれに思されける。（御法、一三八一・六・八）

五・二

そうしたなかで、可能の意かと思われる例が数例ある。

（女三宮ノ降嫁ノ後）三日がほど、かの院よりも、あるじの院方よりも、いかめしくめづらしき雅を尽くし給ふ。対の上（＝紫上）も、ことに触れて、ただにも思されぬ世の有様なり。（若菜上、一〇五八七）

この「思されぬ」は、吉田永弘氏が、（可能は）「主体が事態の実現を望んでいるという点で、自発とは異なる」としておられるのに沿って考えると、これは、「（主体＝紫上ハ、平静ニ）お考えになりたくてもおできにならない」と解されよう。

（患者ノ容態ガ）重しと見れど、おのづからおこたるけぢめもあらば頼もしきを、（快方ニ向カウ兆シノナイ紫上ヲ、光源氏ハ）いみじく心細く悲しと見奉り給ふに、異ごとと思されねば、（予定シテイタ朱雀院ノ）御賀の響きもしづまりぬ。（若菜下、一一六九10）

これは、「（光源氏ハ、紫上ノ容態以外ノコトヲ）お考えになりたくてもお考えになれない」と解してよいであろう。

（薫君誕生後ノ七夜ノ祝宴ニハ）致仕大臣など、心殊に仕うまつり給ふべきに、（長男柏木重篤ノ）この頃は何かとも思されで、おほぞうの御とぶらひのみぞありけ

る。（柏木、一二三四14）

これは、主体の致仕大臣が望んでいることについてではないが、「（オ考エニナラナケレバナラナイハズノ、ドノヨウナコトモ）お考えになれなくて」という解釈が成り立つであろう。

このような、可能の意かと疑われる例が少数見られる。

五・三

受身の意（か）と思われる例はない。

なお、小杉商一氏は、先の論稿において、「思さる」の「る」には「受身の用法と見える用例」が「数例見られる」とされる。同氏が示されたその例は発話文・心話文における用例である。

六 結

主体敬語「思す」に下接した助動詞「る」について、これを尊敬の意とすることは、「思さる」と「思す」との使用対象の間に身分差が見られず、当該敬語の敬意度の測定

が使用対象の身分に基づいて行われるのが唯一・通常の方法であることからして、その根拠を持たない。「る」はほとんどの用例において自発の意を表し、可能の意を表すかと思われる用例が少数見出される。これが小稿の考察で得られた結論である。

もとより、より敬意度の高い「思し召す」が併存するなかで、それ自体が主体敬語である「思す」に下接した「る」は、「思し召す」に下接した「る」がそうであるように、本来、敬意度を増強するためのものではなく、その他の意味を添える役目を負ったものであったはずである。

なお、「思さる」の「る」に自発の意を表す用例が多いことについては、そもそも「思ウ」営みが、周囲の状況や情報に接して自ずと生じるものであることに加えて、多用される自発の意を伴う「おぼゆ」に敬語独立動詞が無いこととも無縁ではないように思われる。

註

- (1) 渡辺英二「光源氏の待遇表現」〈『国語国文研究』(北海道大学) 一九七八〥昭和五三年二月〉

- (2) 小杉商一「『おぼえ給ふ』と『おぼさる』」〈『國學院雜誌』第一〇一卷第五号(二〇〇〇〥平成一二年五月)〉

次のような例を挙げておられる(適宜、本文の引用を増補し、補注を加える。以下同じ)。

(柏木↓女三宮)「かういとつらき御心に、現心も失せ侍りぬ。すこし思ひのどめよと思されば、あはれとだに宣はせよ」〈若菜下、一一八〇4〉

(夕霧↓落葉宮)「(私ヲ避ケルタメニ) かばかりのけぢめ(〓コノ襖程度ノ隔テ)をと、強ひて思さるらむこそあはれなれ」〈夕霧、一三二七7〉

- (3) 吉田永弘「『る・らる』における肯定可能の展開」〈『日本語の研究』第九卷第四号(二〇一三〥平成二五年十月)〉
- (4) 次のような例を挙げておられる。

(光源氏↓前斎院)「(アナタノ母上ニ) 聞こえさせ、宣ひ置きしことも侍しを、(母上亡キ) 今は隔て無きさまに思されば、うれしくなむ」〈落標、五〇八5〉

(夕霧↓落葉宮)「かばかりにてさぶらはむが、人よりけにうとましうめざましう思さるべきにやは。数ならずとも、御耳慣れぬる年月も重なりぬらむ」〈夕霧、一三二六9〉

(5) ただし、四・二に挙げた例のように、「思ふ」が「考エル」営みを表す場合には意志を伴うものになる。

〔付言〕

小杉商一氏の挙げておられる各例についての検討は、そのいずれもが発話文・心話文中の用例であることから、小稿ではこれを省略するが、氏の挙げておられるなかから一例だけを（前後の文脈を補って）取りあげて、発話文・心話文中の用例に対する基本的な考え方を述べておきたい。

（亡キ六条御息所邸ニ、光源氏ガ）御みづからも渡り給へり。宮（＝御息所ノ娘、前斎院）に御消息聞こえ給ふ。

（宮）「何事もおぼえ侍らでなむ」と、女別当して聞こえ給へり。（光源氏）「母上ノ御生前、コレカラノアナタノオ身ノ上ニツイテ、私カラ）聞こえさせ、（私ニ）宣ひ置きしことも侍しを、（母上亡キ）今は隔て無きさまに思されば、うれしくなむ」と聞こえ給ひて、〈濔標、五〇八五〉

この「思さる」の「る」をどのように解釈するかについては、たいそう悩ましい。何よりも、はたして他人の「思ウ」営みを自発で表現することがあったのか。次に挙げるのは、話し相手（二人称）が主体の「おぼゆ」の使用例である。

（光源氏ガ紫上ニ）「（私ヲ置イテノ出家ナド）あるまじくつらき御ことなり。（出家ハ）みづから深き本意あることなれど、（私ノ出家後、アナタガ）とまりてさうざうしくおぼえ給ひ、ある世に変わらむ御有様の後めたさによりこそながらふれ。…」〈若菜下、一二三五三〉

やはり、地の文中の用例についての検討を踏まえれば、発話文・心話文中の用例についても、原則として自発と考えたいのである。そもそも、同一の執筆者によって書かれる地の文中の用例と発話文・心話文中の用例との間に、例えば「む」に対する「むず」のような、外形が異なるのではない、外形が同じ言語単位の語法上の用法が異なることがあるとは思われないのである。右に挙げた例についても、光源氏が提示した「聞こえさせ……侍しを」という条件のもとでの宮の自ずからの「思ウ」営みであると考えたいのである。